



おかやまICT 活用実践事例集

GIGA取材編 2022年3月

高特版



小学校



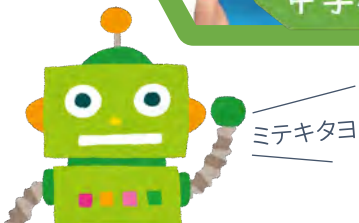
中学校



高等学校

27
事例
200
実践を掲載
!

岡山県内学校等





はじめに

GIGAスクール構想の推進の中で「見えてきたこと」

岡山県総合教育センターでは、GIGAスクール構想の推進に向けて、研修講座（経年研、管理職研、事務研、専門研）、研修支援、調査研究（GIGAスクールに関する学校取材）等、幅広く取組を行ってきました。

多くの教職員と情報交換や協議を行い、取組の具体や成果、課題についての情報を収集することが出来ました。それらの内、多くの学校で共通する内容を「見えてきたこと」としてA～Hにまとめました。

GIGAスクール構想の推進に関する「各校の動き」

A 推進体制の工夫

組織体制に工夫がある学校は
取り組みが進んでいる

B 活用の特色

学校の課題解決にICT活用を
活用している

C 授業での活用

児童生徒の学習意欲の向上を
感じている

D 教職員間格差

活用が進んでいる教員ほど
効果や成果を感じている

E 校内研修

外部講師より校内の担当者が
行う方が効果がある

F 校務の情報化

オンライン会議やペーパーレス
会議に取り組んでいる

G 担当者の負担

担当者等一部の教員の負担が
増えている

H 校内の連携

活用に統一ルールがあると
児童生徒の負担が減る

I 安全と責任

自由な活用には従来の情報
モラル以外にも指導が必要

「各校の動き」から見えてきた課題と「研修二一ズ」

見えてきた課題

- ・活用について各教員の裁量に任されている
- ・情報管理担当者の負担が大きい
- ・端末利用のルールと指導の徹底が必要
- ・情報共有が限定的で効率化できていない
- ・学年や学校間などの連絡調整できる仕組みがない
- ・地域や保護者との効率的な情報共有に課題がある
- ・端末の持ち帰りには保護者の不安が大きい
- ・ルールによる禁止の指導には限界がある
- ・タイピングスキルの差が大きく活動に時間がかかる
- ・オンライン授業に必要な機器を知りたい
- ・オンライン授業がうまく実施できない
- ・授業の説明動画を作成したい
- ・ICTを使うだけの実践になっている
- ・端末が目新しいのは最初だけだった
- ・これからの学びに生かせる活用を目指したい

課題解決に必要な方向性（研修二一ズ）

リーダーシップと
組織体制の整備

校務の情報化の推進と
授業外での活用の充実

情報活用能力の育成と
情報モラルの指導の充実

遠隔・動画技術の活用と
学習形態の工夫

学習指導要領への対応と
主体的な学習活動の充実



「見えてきた課題」への対応のための研修資料

【PDF資料】

■ おかやま I C T 活用実践事例集 GIGA取材編 (本誌)

・岡山県内の学校等取材したまとめ、27件200事例を掲載しています



【動画 + 研修資料】

■ 教育の情報化ユニット研修プラス <授業づくり編>

01 校内の推進体制づくり

・校内の「推進体制づくり」に必要な3つの視点を具体的な事例とともに学びます

02 デジタル・シティズンシップ

・情報モラルに関する指導を拡充し、情報社会との「適切な付き合い方」を考えます

03 遠隔技術を活用した学習指導

・「オンライン授業やハイフレックス型授業」について学びます

04 主体的な学習活動につながる I C T 活用

・これからの学びにつながる I C T 活用を「教師の意識のステップアップ」で考えます



【参考】1人1台端末の入力技能（タイピング等）に関する系統的な指導イメージ

※ 研修講座の協議やGIGA取材の聞き取りにより、岡山県総合教育センターが作成

- ・ホームポジションや変換、文節の切り替えなどのキー操作は教える必要がある。
- ・決められた文書の入力や事前に自分で考えた文章の入力。
- ・タイピング練習のサイトの活用も有効。

入力することを活用する

思考 入力

目安：10分 300文字
(中3～高1)



日常生活の中で、
思考を妨げない程度の、
入力技能を身につける

- ・日常的に、文章を考えながら入力する活動を取り入れる。
- ・学習の振り返りや日記等。
- ・文章を入力しながら、推敲するなどデジタルの良さを活かす。

入力することの 働きや役割を知る

視写 入力

ある程度の技能を
身につけるまでは、
タイピング練習が必要

- ・ローマ字の学習と連動して、ローマ字入力に挑戦する機会を設ける。

ローマ字の学習
(小3国語)

目安：10分 100文字
(小6～中1)

入力することの 楽しさを知る

入力 体験

様々な入力方法の体験
(主体的な働きかけを知る)



児童生徒の実態や
カリキュラムに応じた
柔軟な取組

▲ 入力技能イメージ(タイピングの入力数) ▼



低学年

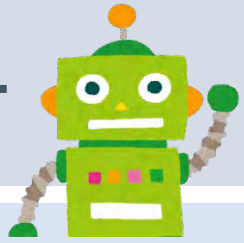
小学校
中学年

高学年

中学校

高等学校





■ 小学校

赤磐市立山陽小学校



ICT活用の実践

P5

井原市立芳井小学校



校内での活用方法共有・
1人1台端末を活用した授業実践

P7

高梁市立落合小学校



タブレット端末を活用した「思考を深める」「表現力を高める」授業の取組

P9

新見市立萬歳小学校



小規模校における
ICTを活用した授業

P11

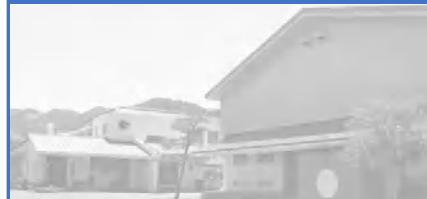
真庭市立河内小学校



1人1台端末を活用した
授業実践と学習環境

P13

真庭市立月田小学校



1人1台端末を活用した
授業実践と学習環境

P15

真庭市立中和小学校



豊かな自然と地域との
連携を活かした小規模校の取組

P17

美作市立美作北小学校



1人1台端末を活用した
6年生理科の実践

P19

奈義町立奈義小学校



1人1台端末を活用した授業・
組織的な推進体制・校内研修

P21

■ 小中一貫教育校

新庄村立新庄小中学校



地域学習と教育の情報化の推進で
地域を支える人材の育成

P23

■ 中学校

岡山県立津山中学校



1人1台端末を活用した
英語・数学・理科の実践

P25

赤磐市立磐梨中学校



1人1台端末を中心とした
ICT活用の実践

P27

井原市立芳井中学校



1人1台端末を活用した実践

P29

高梁市立有漢中学校



高梁市立川上中学校との
合同遠隔授業

P31

新見市立新見南中学校



平成26年度から1人1台端末を
実現している先進地域の取組

P33

おかやまICT活用事例集（GIGA取材編）は、岡山県総合教育センターが岡山県内の学校等へGIGAスクール構想の推進に関する取組について、学校等へ取材を行い、広く参考になる事例としてWeb掲載したものをとりまとめ1冊にしたものです。校内研修や自己研修にご活用ください。



Web版

■ 教育委員会

奈義町教育委員会



幼小中連携・端末持ち帰り・遠隔授業

P35

■ 高等学校

岡山県立岡山朝日高等学校



解説動画の活用・校内研修の実践・1人1台端末の活用実践

P37

岡山県立岡山芳泉高等学校



授業活用・校内研修の実践・1人1台端末の活用実践

P39

岡山県立岡山東商業高等学校



ロイロノートの活用・1人1台端末の活用実践

P41

岡山県立水島工業高等学校



授業活用・個別最適化・1人1台端末の活用実践

P43

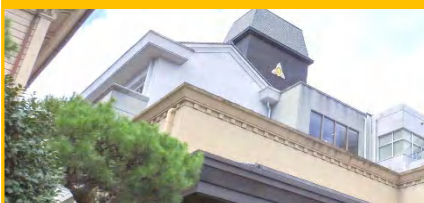
岡山県立玉野光南高等学校



県内公立学校唯一の情報科を持つ学校の実践

P45

岡山県立津山高等学校



校内研修の実践・1人1台端末の活用実践

P47

岡山県立笠岡高等学校



主体的に学び成長することを期待した1人1台端末の活用

P49

倉敷市立精思高等学校



生徒全員が安心して学べる環境づくりを実現する市立高等学校の実践

P51

■ 特別支援学校

岡山県健康の森学園支援学校



GIGAスクール環境で教育の情報化の取組がさらに加速

P53

岡山県東備支援学校



地域交流と児童生徒の主体性を引き出すICT活用

P55

■ 教育センター

岡山県総合教育センター



研修の質の向上と効率化を目指したDX戦略の取組

P57

GIGAスクール環境活用分類 ※ 参考として事例の実践のねらいや効果をアイコンを使って分類しています



クラウドやアプリの活用



デジタルデータの保存



思考やデータの可視化



データの共有や共同編集



対話を充実させる活用



思考を促す活用



表現を充実させる活用



課題のやり取りと評価の支援



効率化や省力化

※ 「Google Workspace for Education で創る10X授業のすべて」を参考に作成



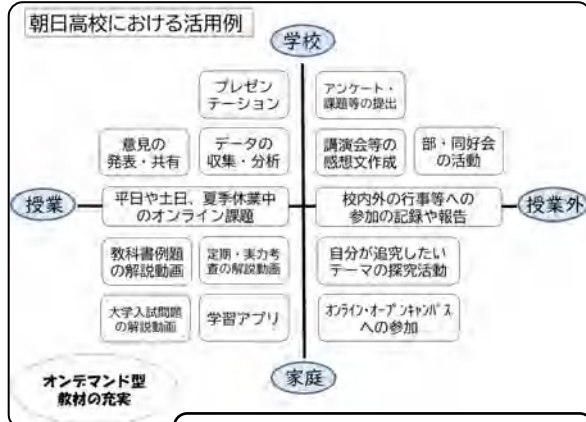
岡山県立岡山朝日高等学校でのGIGAスクール構想推進の取組を取材しました

【概要】

岡山朝日高等学校では、「本質的な学力を獲得するとともに自己表現するための道具として校内外で活用」という方針を掲げています。

Chromebookの校内外での活用例をマトリックス図(右図参照)に落とし込み、全体の見取り図を作成して、生徒、保護者、教職員の間で共有しています。

以下は、その活用の一例を紹介します。



【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

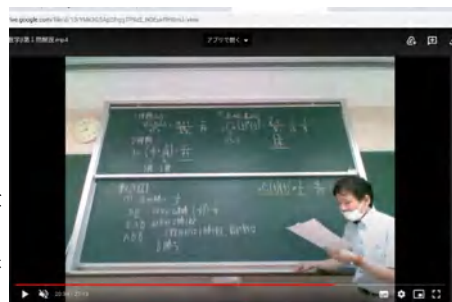
Chromebookの校内外での活用例
～マトリックス図～

A 教科指導における活用

1 定期考査・実力考査の解説動画を共有し、振り返りや反復学習に活用 (Google Classroomや共有ドライブを活用)



- ・解説動画は、生徒のつまづき易い問題や質問の回数が多い内容を中心に作成しているため、生徒は、反復学習や振り返り学習が行える。教員は、発展的な内容を中心に質問への対応ができる。
- ・蓄積している解説動画は、良質な内容を中心に扱っているため、数年後においても実力をはかる教材として活用できる。
- ・GoogleのClassroomのストリームを活用することで、生徒はいつでも解説動画を参照できる。
- ・教材配付用のGoogleドライブを活用し、複数の解説動画を構造的に整理し、対象の動画が検索しやすい。
- ・今後、教科書の例題や大学入試問題の解説動画の作成も予定している。(2・3年生はすでに作成済み。)



2 Google Classroomを活用した課題のやり取りや教材配付 Google Jamboardや学習アプリ等を学校や家庭で活用



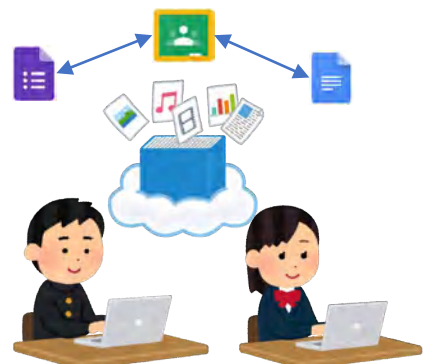
- ・1年生の1人1台端末は、情報で使い方や情報モラルを中心に説明が行われた後、5月中旬から他の教科等での活用がスタートしている。
- ・英語、数学、公民、総合的な探究の時間等では、Google Classroomを使って、教材を配付したりオンライン課題のやり取りをしたりしている。保健等では、Google Jamboardを使った効果的な思考の共有と可視化をしている。
- ・英語等ではChromebookに学習アプリをインストールした独自の活用をしている。



3 進路講演会など、校内外の行事等への参加の記録や報告をポートフォリオ化するため、Googleのクラウド上のグループウェアサービスの有効活用



- ・Google Formsとドキュメント、Classroomを連携させた効率的な仕組みを独自に構築している。
- ・生徒は、Google Classroomのストリームから該当のファイルを選択するとマイドライブにファイルが自動的に作成され学習履歴として継続的に保存することができる。Google Formsのファイルを添付する機能を使って、翌日にはレポートが提出できるようにしている。
- ・回収担当者は、効率的に全校生徒への課題配付、回収を行うことができる。



B 推進体制の整備と校務への活用

4

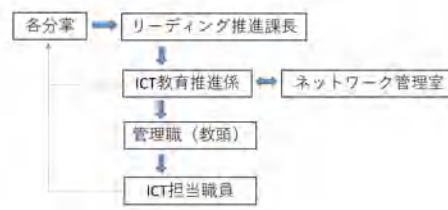
ICTを活用した行事の実施や会議等への参加に関する支援体制の構築が、学校全体の取組となり活用へつながる



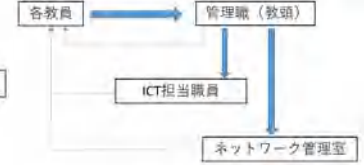
- ・4月当初は、学校全体におけるICTの活用について戸惑う場面もあったが、推進体制を構築してからは、スムーズな活用が行えるようになっていく。
- ・支援要請は、リーディング推進課に相談することからスタートし、ICT教育推進係、ネットワーク管理室（ハード系）ともうまく連携し、取組を進めている。
- ・各種配信のパターンに応じた準備と対応を行っている。

ICTを活用した行事の実施や会議等への参加に関する支援要請の流れ

①学年集会、講演会、式典等を実施する場合



②会議・研修等に参加する場合（個人による活用）



5

本校のニーズ・課題に即応する校内研修の実施



- ・ICTの利用に関して日々の先生方の困り感を吸い上げ、校内で研修ができるように準備をし、タイムリーな研修を全教職員に行っている。同僚が自分の工夫を講師となって広めることを基本としている。
- ・5月に、生徒の学びを止めないため、教職員全員を対象とした説明動画を作成する研修を実施した。1人1台端末を活用した、すぐに活用できる内容で、学校を休んでいる生徒へ授業動画を配信するなどの活用が進んでいる。



6

PTA行事や学年行事、進路講演会などにおける各種配信の充実（行事の内容に合わせた配信方法の選択）



- ・ZoomやGoogle Meet、YouTube Liveなどのメリットとデメリットを把握し、適時適切なシステムを選択して配信をしている。
- ・5月に、少人数で相互のやり取りが必要なPTA新旧役員会や2年生の保護者懇談会にはZoomを活用し、大人数が対象の第1学年合同保護者会には、1人1台端末を活用し、YouTube Liveを利用した限定公開による配信を実施している。



C 課外活動での活用と新たな取組

7

部活動における遠隔技術を活かした活用



- ・文学部が俳句の講師の方とリモートでやり取りをしている。
- ・数学同好会が中心となり、特別数学講座の中で、年間10回ほど、京都大学の名誉教授から大学レベルの学術的な探究について、生徒の希望に合わせてながらリモートで実施している。
- ・茶道部が、将来アメリカ国務省に勤める全米トップ大学の学生たちと、茶道文化をテーマにリモートで交流している。



【まとめ】

岡山朝日高等学校では、3年ほど前から行われていた入試問題の解説動画の作成・活用が素地となり、コロナ禍での対応も全教職員で試行錯誤を繰り返しながら取り組むことで、ICTの効果的な活用につながっているように感じました。各教科の取組もさることながら、校内組織体制が全教職員に周知され、様々な学校行事や学習活動の中でうまく機能していることが、学びの深化への足掛かりとなっていました。

今後、さらにICT活用の充実に向けて全教職員で取り組むことによって、岡山朝日高等学校が掲げているGIGAスクール構想で実現したい学び（本質的な学力を獲得するとともに自己表現するための道具として校内外で活用する）につながるのではないかと考えました。



岡山県立岡山芳泉高等学校でのGIGAスクール構想推進への取組を取材しました

【概要】

一昨年度から岡山芳泉高校では情報企画課（各年次3名程度）を中心に、授業内外を問わずICT活用を進めてきています。1人1台端末となる新入生の入学を来年度に控え、様々な準備が進められていて、授業については、特に実技系科目での利用が盛んで、今まで時間がかかっていた内容が簡便に行われています。また、授業外では遠隔での講演は頻繁に行われ、コロナ禍での2度目の文化祭では端末をうまく活用し、生徒自身が盛り上げる方法を積極的に考え行動しています。さらに、臨時休校の可能性に備えて、全授業で生徒との連絡が取れるようにClassroomを活用して準備を進めています。

ICT環境：生徒用端末（iPad）約80台 AppleTV 単焦点プロジェクター Googleworkspace など

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 実技を伴う科目（芸術）における活用

1 音楽では、演奏テストをClassroomに動画で提出し、すきま時間に評価が可能になり、生み出された時間が直接指導にあてられるようになった。



三線の演奏テストを行う際に、演奏を各自で録画させ、Classroomに課題として提出させている。教師は提出された動画を見て、成績をつけ、本人にも通知する。

以前は、音楽室で1人ずつ演奏を聞いてその場で採点していたが、端末を活用することで、職員室で作業したり何度も見返したりでき、採点精度が非常に上がる。また評価の根拠も残り、生徒にとっても自身のポートフォリオとなる。



とにかく時間の余裕が生まれた！

2 美術では、作品の相互評価をFormsで行い、作品のポートフォリオが可能になった。また、コツの説明動画を共有して、自分のペースで制作が可能になった。



完成した作品の写真をiPadで撮影し、授業ごとのClassroomで共有している。さらに、採点用のFormsで生徒同士が相互採点を行い、コメントもつけている。Spreadsheetに一覧で表示されることで、見やすくもなる。

以前は、作品に生徒同士で付箋をつける形で相互採点とコメントをしており、その場限りになることが多かったが、コメントが残る方が生徒のモチベーションを上げることにつながると考えて、この形とした。

また、自画像制作では、描画の進め方のコツ動画をClassroomで共有したところ、生徒たちは自分が確認したい箇所を確認しながら、スマホで自撮りした自身の顔を見て、制作を進めていた。

以前は、鏡で見ながら描いていたが、表情をキープすることが難しく、描き方を一斉指導しても、一度では伝わりきらなかった。特に筆遣いをスローで見られることが、生徒には嬉しい様子だった。



撮影は慣れたもので1分で完了



情報教室で一斉に相互採点



コツ動画を共有する



「編集せず、簡単に。」が長続きのコツ



自撮り画像を見ながらペンタブで

3 書道では俯瞰映像を繰り返し見ることが可能になった。

書道室の天井に、端末を乗せて撮影できるように、穴が開いた段ボールを張り付けた。生徒が各自で自分たちの描いている様子を撮影し、どう見えているかを振り返ることができる。

以前は教員が見た姿をその場で伝えるか、ビデオカメラで撮影してTVで見る、というスタイルだったが、端末が普及してから非常に簡単になった。今では文化祭などでの映像編集も自分たちで軽々と行っている。



脚立で上り下りして操作する

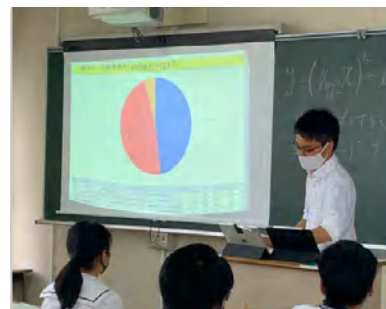
B 広がる反転学習スタイル

4 様々な教科で反転学習へのチャレンジが広がっている。



授業前に、自分たちで教科書を読み、短い解説動画を見て、小テストに臨み、回答をFormsで入力、提出した上で授業に臨む。授業では教科書の内容説明はせず、正答率の低い問題のポイントから解説を始めたり、「どのように自分たちが取り組んだか」、「どこがわからないのか」をディスカッションするAL（アクティブラーニング）型スタイルで授業を展開したりする教科が増えてきている。

生徒にとっては「他のみんなはどのように考えているのか？」が分かり、教師にとっては、「生徒がどこでつまづいているのか？」が可視化される。最初の1～2時間は端末の操作に慣れるための時間が必要だが、授業スタイルがフォーマット化されると効率的に授業を進めることができる。



正答率を瞬時に表示できる



机間指導に十分時間がとれる



ホワイトボードで思考を整理する



チョークでの手荒れも少なくなった

C 学校行事などでの利活用と休校への備え

5 文化祭・卒業生と語る会・土曜講座の講演会などを、ZoomやMeetでつなぐのは、もはや当たり前になりつつある。



文化祭は残念ながら学校関係者のみでの開催となった。1、2年生のクラス発表は動画を制作し、生徒が編集し、生徒会（文化祭実行委員会）のClassroomに提出した。当日は生徒が動画を鑑賞して、各自の端末からFormを使用して採点を行った。

以前は成績集計を紙で行っていたが、端末を使うと一瞬で終わり、効率が良い。「1人1回以上投票してしまうのでは？」のような不安も当初はあったが、設定次第で解消でき、現在は生徒も慣れているので、戸惑うこともない。

卒業生や大学の先生方との交流はZoomやMeetを使い、比較的頻繁に遠隔での講演会などが行われている。中には、自分からアクセスして、進路の相談や質問をするなどして、関係性を深めている生徒も出てきている。



本部は会議室に



教室と遠隔でつなぐ

6 感染拡大による急な休校や学級閉鎖等、生徒が通学できない状況を想定して準備している。



全ての授業において、Classroomの開設と生徒の参加を確認した。生徒からすると、自分が受けている全ての授業ごとに、Classroomが存在し、Web上で教師から連絡が可能な状況にある。もし、何らかの事情で登校できない状況になった場合、時間割は変えず、すべてがオンラインに移行する。



SHRで一齐に確認済み

【まとめ】

本年度は力を蓄える一年として位置付けられており、次年度からのスムーズな機器導入に向けて、全教職員が知識と経験を積もうと意識しています。授業の質の向上と、効率化を目指すため、できることを増やし、精選し、より学びやすく、より働きやすい学校を目指しているという印象を受けました。



岡山県立岡山東商業高等学校でのGIGAスクール構想推進の取組を取材しました

【概要】

岡山東商業高等学校では、ICT活用で目指す学びについて「授業を通じた様々な学習活動や協働学習によるiPad活用の習熟」「ICT機器の積極的な活用による学習意欲の向上」「適切なアプリ等の活用による個別最適な学び」「体験活動や探究活動におけるICT活用（調査、レポート等）による主体的な学び」の4つの柱を掲げています。これまで8年間に渡って取り組まれてきたICT（iPad）の活用が、1人1台端末の実現によって大きく進化している。その取組の一部を紹介します。

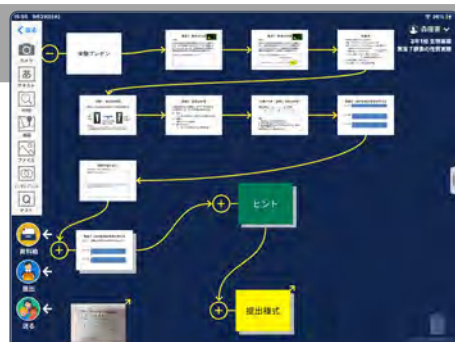
【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 教科指導における活用

1 ロイロノート活用に向けた歩み



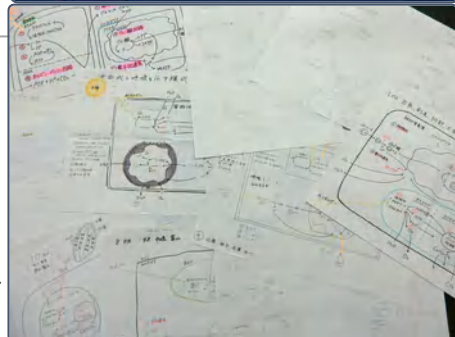
- ・8年前からiPad上で本格的にロイロノートの活用を開始し、主な取組として理科の実験において、補助的に説明動画や資料を提示している。一度の説明では理解が難しい生徒でも自分のペースで繰り返し確認・閲覧できる。
- ・5年前からは、有料版のロイロノートを活用し、タブレットだけで学習を完結させないようにしている。ノートやプリントに書いた考察やまとめを写真機能で撮影し提出させることで、アナログとデジタルのそれぞれの良いところをうまく取り入れる工夫を行っている。



2 思考の可視化やクラス全体への成果物の共有などによる、思考力・判断力・表現力の育成



- ・ロイロノートは操作に対する指示がほとんど必要なく、直感的な操作が可能で、学習内容に集中できる。
- ・1人1台端末の導入によって、個人やグループでの思考後、成果物を共有し、クラス全員に対して瞬時に可視化することができる。
- ・生徒はiPad上に共有された複数の成果物を見ながら、授業内容の理解を深めたり、相互評価したりすることができる。
- ・教師・生徒間だけでなく生徒同士でもロイロノートの中でデータを共有し、発表に向けてプレゼン資料等を作成することができる。
- ・授業の中で、生徒の回答をロイロノートの写真機能で撮影し、全体で共有しながら答え合わせができる。
- ・「総合的な探究の時間」においては、各自の課題解決に向けて、「調べる」、「まとめる」、「発表する」の一連の学習活動で統合的に活用できる。
- ・商業科の授業では、ロイロノートの小テスト機能を使い、回答結果のリアルタイム表示での理解度確認ができる。自動採点により採点時間も短縮できる。



3 商品開発の授業で、学校キャラクターを活用した「高校入試合格祈願文具」の開発



- ・科目「商品開発」（3年生）の授業では、既習内容を活かしながら実際に商品の開発に取り組んでいる。
- ①商品の構成要素に関する情報収集の場面では、ロイロノートのWeb検索機能を利用して、クラウド上に収集したデータを蓄積する。
- ②考案した商品アイデアを説明するための資料作成では、収集した情報を元に、ロイロノート上で提案シートを作成する。
- ③作成した資料を用いた発表会では、発表に用いる資料は、プロジェクターに投影するが、各端末にも画面配信する。細部まで見る必要がある商品設計図は、発表時に画面を拡大し、ポイントとなる部分に注目させる。



B 推進体制の整備と校務への活用

4 「デジタル室」を中心としたICT推進体制と研修の充実が、学校全体の取組となり活用につながる



- ・今年度から「デジタル室」を立ち上げ、各学年に数名ずつ担当者を配置し、ICTの活用の推進と実践を行っている。
- ・ロイロノート・スクールの基本操作やGoogle Workspace演習など、オンライン研修などの外部講師も活用し、テーマを絞った研修を年間14回程度行い、校務の合間を縫って教職員のスキルアップとICT活用の意識向上に努めている。
- ・学校内のグループウェアサービスを使い、校内研修案内などの情報について効果的な発信を行っている。
- ・職員会議は1学期の途中から、朝礼連絡は2学期からペーパーレス化を実践している。



5 教職員の「学び合う」「助け合う」風通しの良い環境、安全・安心なネットワーク環境整備に向けて



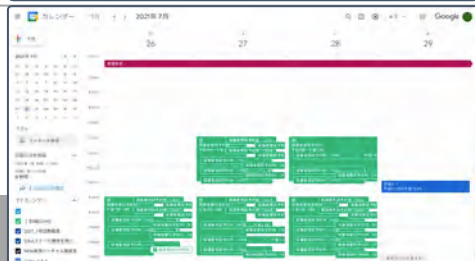
- ・ICTを活用した学習効果や成果をイメージすることが難しい場合も多いため、若手教員が率先してロイロノートを使った授業での効果検証を行い、その成果を踏まえ、職員室では、教職員の「学び合い」「助け合い」が広がっている。
- ・時間割によって集中的にICT端末を使用する場合のトラフィック増加によるトラブル対応として、ネットワークの負荷軽減に向けた原因究明や検証作業などを「デジタル室」を中心に組織的に行っている。



6 保護者面談日程調整の簡略化



- ・教員側が日程調整する必要がなく、保護者が変更してもすぐに反映されるため、直前でないと都合が確定しない保護者にも対応できる。
- ・生徒各自のGoogleカレンダーに反映されるため日時忘れ等も少なくなり、働き方改革につながる取組である。



C 教育活動全体を「つなぐ」活用

7 朝の10分間の学習時間（朝学）を使ったEnglish 4 skillsの活用と検定に向けた解説動画の配信



- ・英語4技能をオンラインで学習できるアプリ「English 4 skills」を導入し、診断結果に基づいて各自で取り組む級を設定させ、生徒一人一人にあった学習を進めている。
- ・実用英語検定や全国商業高等学校協会主催の英語検定の対策として、朝学と家庭学習をつないだ取組を進め、教師は生徒の進捗状況を確認し、個別に助言し効果的な取組を促している。
- ・珠算・電卓実務検定や情報処理検定の合格に向けた朝学でも、端末を活用した説明や演習を行っており、教師の解説を各教室に配信している。解説動画はGoogle Classroomで繰り返し確認できるように工夫している。
- ・会計サポートを活用した、日商簿記3級の解説動画を使った予習・復習が可能である。理解を促進するために、授業だけでなく自宅学習にも応用している。



8 健康観察や各種アンケート、緊急連絡などでの活用



- ・Google Formsなどを利用し、生徒一人一人の健康状況を蓄積し、学校全体で共有することで、体調の変化が把握できるため、過去の健康状態と照らし合わせて病気を未然に防ぐことも可能。また、各種アンケートについても積極的に自動化することで、集計の手間や日程調整を軽減し、働き方改革につなげている。
- ・各クラスや部活動においても、Google Classroomを資料配付や連絡ツールとして活用している。また、部活動については、スケジュール（振り返り）手帳も活用し、アナログとデジタルの双方のメリットを生かした取組をしている。



【まとめ】 岡山東商業高等学校では、8年前から取り組まれているロイロノートを使った生徒の主体性を育むiPadの活用や研究成果をもとに、GIGAスクール構想実現に向けて、全教職員が様々な場面において「学び合い」や「助け合い」ができる風土を大切にし、1人1台端末の導入における新学習指導要領の着実な実施と、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた授業改善の取組を進めています。また、ICT端末の利活用に向けて、学校全体で取り組むための推進体制づくりや校内研修の工夫や充実を図り、教職員の日々の困り感を軽減する取組をしています。これらの取組によって、岡山東商業高等学校が目指しているGIGAスクール構想で実現したい学び（4つの柱）につながるのではないかと考えました。



岡山県立水島工業高等学校でのGIGAスクール構想推進への取組を取材しました

【概要】

水島工業高校ではベテランと若手がタッグを組んで、校内での活用を推進しています。授業においては、特に若手の先生を中心に、工業科目のうち各種の実習での活用が模索されています。今まで実際に見たり、触れたりすることで伝えられてきた『ものづくりの技術』と、『ICT機器』をうまく組み合わせ、授業の効率化と技術の伝承に取り組んでいます。また、資格検定補習ではFormsを用いることで、反復練習のスピードを上げ、結果のフィードバックがスムーズになっています。就職試験指導でも面接練習を録画し、すぐに、いつでも、何度でも確認できることで、個別に最適化した指導が進められています。

ICT環境：生徒用端末（Chromebook）1年全員＋約80台 短焦点プロジェクター Google Workspaceなど

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 実技を伴う科目（工業）における活用

1 工業化学科の分析実習では、操作確認はスライドで、実習データの共有はスプレッドシートで行うことで、操作に充てる時間が増えた。



板書で確認していた実習操作は、スライドを共有することで生徒の端末でいつでも確認することが可能になった。測定値の共有は、以前からExcelで行ってはいいたが、スプレッドシートに変えたことで、教師側の把握が容易になった。また、レポートの提出は紙とデータ（PDF）を併用しており、両者の良いところを残しつつ上手に活用している。



タブレットを横に置いて実習中

2 旋盤や鋳造などでは手順や注意点を録画することで、繰り返しの視聴が可能になった。いずれはライブラリー化を目指している。



実習では一般的に、教師が手順や注意点を実演して、その後生徒が反復練習を行っていく。タブレット端末を用いて手順を録画することで、一度ではわからなかった場合や、欠席した時でも生徒が繰り返し視聴できるようになった。

また、年度当初着任した教師が、自校での取組を予習することにも適している。

このような取組は、沖縄県教育委員会の教育支援ビデオ「OPEN EV」のYouTube動画を参考にしており、見やすい角度だけでなく、肖像権を意識してなるべく生徒の顔を写さない工夫もしている。

今後は、ベテランから若年層への技術の伝承も意識して、工業技術ライブラリーができたかと考えている。



見やすい角度を意識して撮影する



肖像権を意識して顔を入れない

3 調べてから質問するという習慣ができ、生徒の学びへの姿勢が変わった。



生徒が「わからん！」という頻度やあきらめる場面が以前より減った。わからないとき、すぐに調べることができ、調べてから質問する習慣が定着してきている。生徒の学びに対する姿勢が変わったように感じられている。



疑問をすぐに調べ、授業が受けやすくなった

B 端末利用で可能になった“個別最適化”

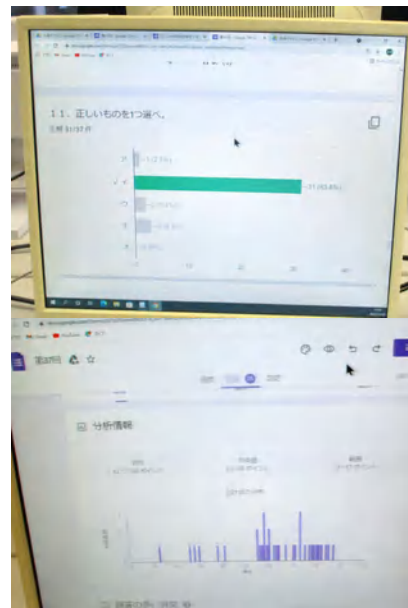
4 資格検定試験に向けた補習では、Formsを利用した小テストで自己採点と苦手分野の指導を効率的に行えるようになった。



「危険物取扱者試験」や「情報技術検定」など、資格検定に向けた補習では、Formsで小テストを行い、自己採点や正答率の把握、苦手分野の指導がとても効率的に行えるようになった。小テスト → 採点 → 苦手把握 → 再指導 が短時間で可能となっている。

また、履歴が残り、クラス内での順位などもすぐにわかるので、生徒自身が成長を感じやすく、モチベーションアップにもつながっている。

一方で、計算系の問題や、記述式の問題はFormsでは対応しにくいので、従来型の紙による小テストも併用している。すべてをデジタルで行おうとせず、良いところを上手く活用するように意識している。



正答率を瞬時に表示できる

5 ClassiによるWebテストを導入し、基礎学力向上に向けた取り組みを継続している。



以前から基礎学力向上に向けた補習を行っていたが、同じプリントを用いて一斉指導で行っていたため、個々の学習進度に応じた対応をすることが難しかった。そこで、Classiを用いることで個別最適な学びができるようになった。「1対40の授業」から「1対1が40組ある授業」へと変わっている。



手書きより楽で速い

6 就職試験のための面接指導は録画して生徒へフィードバックし、空き時間には企業のHPをチェックしている。



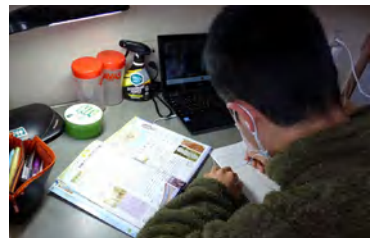
面接の様子を撮影して自ら確認したり、他者との違いを比較したりする点は従来と変わらないが、生徒へ簡単に動画を渡せるようになったので、自宅でも見直すことが容易となった。

また、企業HPをチェックさせやすくなり、懇談時にも利用している。さらに、一部企業では面接試験後の適性検査が遠隔実施となり、生徒は学校で受検することとなったが、特に問題はなかった。

7 MeetやZoomを使って、学校と他校や企業、学習寮をつないでいる。



リモート配信を利用して、つながる場面も多くある。建築科は国道工事現場見学会に遠隔参加した。工業化学科では岡山大学の教授の講演を聞き、課題研究のチームに報告した。倉敷市立旭丘小学校との交流学习も遠隔実施できた。また、学習寮のWi-Fi環境を整え、休校期間中に通常授業をライブ配信することもできた。



【まとめ】

『誠実は人間最高の善である』を校訓とする水島工業高校では「録画」「共有」「検索」「Forms作成」といった、端末のシンプルな操作方法を誠実に、確実に繰り返して成果を上げている印象を受けました。簡単なことほど取り入れやすく、長続きする、という見本のような取組が多く見られました。



岡山県立玉野光南高等学校でのGIGAスクール構想推進の取組を取材しました

【概要】

GIGAスクール構想実現に向けて玉野光南高等学校では、ギガの1000倍の「テラ」を目指していく意気込みと目標を「テラ☆光南」と名付け、Chromebookを文房具として思い切り使いこなすための取組を実践しています。また、新しい時代に必要となる力を育成するため、生徒と教職員が一体となり1人1台端末を活用した新たな学びを創造しています。その取組の一部を紹介します。

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 教科指導における活用

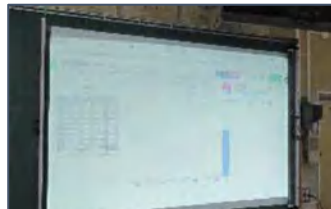
1 1人1台端末を活用した生徒の学びに向かう力の育成

【普通科2年生の化学基礎「酸と塩基」の授業】

- ①【事前学習】前日までに課題としてClassroomに実験器具の操作方法等を解説した動画を配信し、生徒は自宅などで実験の意義と操作の方法について確認する。
- ②【実験操作の説明・確認】当日の授業において安全面での配慮が必要な部分を再確認する。
- ③【実験の実施】操作に自信がない場合は、教科書や動画で再度確認する。疑問があれば、Web検索なども用いて考える。
- ④【実験結果の共有】スプレッドシートにデータを入力し、他の班の結果と比較する。プロジェクタで投影し、共有する。
- ⑤【考察】実験結果をもとに考察を行うとともに、自分と他の班の結果を比較し、差異がある場合には原因についても考える。



スプレッドシートに実験結果を入力



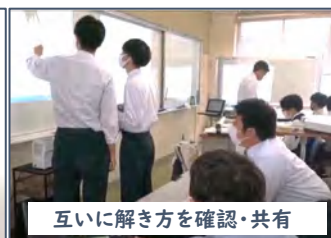
プロジェクタに投影し全体共有

2 生徒が「教えること」で質の高い学びを生み出す取組

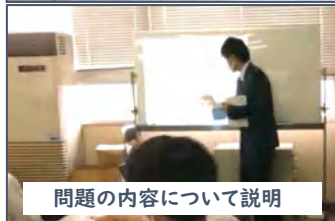
- ① 反転授業として、担当教員が事前に動画を作成し、Classroomに投稿する。
- ② 生徒は、問題の説明動画が記録されているQRコードを使って内容を確認し、次の時間に備えてグループのメンバーに説明ができるように予習する。
- ③ 授業では複数の班に分かれ、それぞれプロジェクタとホワイトボードを使って互いに教え合ったり、問題を解き合ったりして学習内容を深めている。
- ④ 生徒が主体的に学習活動に取り組む姿が増え、互いに教えることが質の高い学びにつながっている。



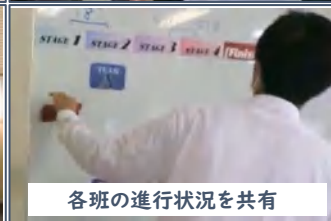
事前に説明動画を確認



互いに解き方を確認・共有



問題の内容について説明



各班の進行状況を共有

3 貸出用端末を活用した授業の取組 (2・3年生)

- ・授業の参考となる動画を端末で見て、意見を集約し、個々の考え方をアウトプットする流れ。
- ・生徒は、授業課題に応じて思考を働かせ、ICTを積極的に活用している。
- ・教員は、1人1人の生徒の主体的な学びの促進や端末を活用した効果的な学習活動を実現するために貸出端末を活用している。



ICTを活用したアウトプットの工夫



貸出用端末

4 授業と家庭学習の一体的充実に向けた取組における 反転学習を取り入れた実践



【スポーツⅠ（陸上）の授業】

- ①【事前学習】前日までに授業内容をClassroomで確認し、授業のゴールを見通す場面を設定する。
- ②【授業のねらいと活動内容の共有】前回までの学習内容について簡単に復習、本時の活動内容の確認と参考となる映像（資料）を全員で共有する。
- ③【授業のねらいに対する考察】本時のテーマに対して考察した内容をグループで共有する。
- ④【考察した内容を検証・確認】実際に演技し、その様子をChromebookで撮影する。
- ⑤【フィードバックタイムと再試行】即座にグループで映像の確認と意見の共有、改善に必要な視点を踏まえ再度演技し、さらにブラッシュアップしていく。
※各グループから意見を出し合う時間もある。
※参考映像を再度確認することもある。
- ⑥【授業の振り返りとまとめ】本時のテーマへの達成度・理解度の確認、各グループでの反省、授業のまとめを行い、最後に、家庭学習として個人の振り返りを行う際に使用する個人ノートについて説明する。
- ⑦【事後学習】授業日の指定時間までにGoogleスライドに個人ノートを作成し、提出する。



⑦

Googleスライドを活用した個人ノート

スポーツ陸上競技ノート 12月24日天気曇り

本日の学び
・助走の前の準備の意味を知る。
・自分に合った助走の前の出し方を考える。

活動の振り返り3種類（自分の動き・良かった人・活動場など）
・自分は最初に足を引く、体をそらしてからスタートするのがやりやすかったです。
・遠まわりの助走のときに最初は太股で走り、そこから小股で走ることによって、リズムをとっていました。
・みんなで教え合いをしななうっていい練習ができました。

次回への課題、今日をまとめるの課題、自分と、振り返りで良かった人の自分の学びを、書くことです。自分がじつや学びましたこと、これを改善したいです。一歩は前進が必要だと思っています。だから書き留めておきました。

5 「私の最高の勉強法プレゼン」の活動



- ・入学後すぐに、自分自身を振り返り、自分に向いている勉強法を探し、定期考査で実践する取組を行っている。
- ・学習過程の中で、自分でまとめた勉強法をグループで発表し、お互いの勉強法を共有する。
- ・教員と生徒と一緒に「授業を創っていく」ような、生徒の主体性を生み出す授業づくりを実践している。



B 発展的な取組を見据えたICT活用

6 思考力、判断力、表現力等の育成を目指す学習・指導方法 の確立と評価方法の工夫改善【体育科】(教育課程研究指定校事業)



【2年目の成果】

- ・コロナの影響で計画を変更することもあったが、授業の目的を教員と生徒で共有して始めることができ、授業改善を進めることができた。
- ・指導と評価の計画を活用することで、これまで以上に「指導と評価の一体化」を意識した指導ができた。
- ・集計アプリを活用することで、学習カードを蓄積でき、授業改善につながった。
- ・2年目は生徒主体の活動を増やすことで、他者を意識した活動や会話が増え、男女共習の中で共生の意識を高めることができた。

参考：岡山県立玉野光南高等学校 研究発表資料一部抜粋

思考の可視化

| 学年・学期 | 単元 | 指導内容 | 授業実践の工夫等(留意点) |
|--------|-----|------|---------------|
| 2024年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2023年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2022年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2021年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2020年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2019年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2018年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2017年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2016年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2015年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2014年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2013年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2012年度 | 2.0 | ... | ... |
| 2011年度 | 2.0 | ... | ... |

授業の最後にプレゼンテーションの実践で表現力と共生の意識づけ

【まとめ】玉野光南高等学校では、学校の課題解決に向けた取組を推進するため、生徒主体のICT活用を授業改善の柱とし、根拠となるエビデンス（数値化したもの）を共有することで教職員の意識の変化を促し、新たな学びの創造に向けた様々な取組を実践しています。例えば、研究成果に基づいて意図的な反転授業を行い、学校と家庭の学習活動をつなぐ仕掛けづくりや、生徒自身の勉強法から考察・実践させ、質の高い学びを生み出す授業づくりの工夫など、まさに一人一人の生徒が主役となる取組が印象的です。さらに、それらはICTの特性を踏まえた効果的な活用であり、夢の実現に向けて挑戦し続ける生徒の学びを支えるツールとなっています。これらの取組は、高い専門性を活かした先進的かつ多様性に富んだ実践であると感じました。



岡山県立津山高等学校でのGIGAスクール構想推進への取組を取材しました

【概要】

『まず使っていこう!』『使ったらいいことありそう!』を合言葉に、端末を持つ1年生の授業を中心として、授業やHR、進路指導等でGoogleのアプリを活用した実践が増えつつあり、そのメリットとデメリットを検証しながら実践例が蓄積されています。

組織として主導できる人員を増員配置し、校内研修では年度当初に自由参加の形で“自主研修会”を開催しました。また、総合教育センターの遠隔研修では、各教員が持つ端末に資料を共有することで、紙媒体の配布をしない研修形態でした。

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 教科指導におけるメリットとデメリット

1 多くの教科でJamboardを活用したグループ学習を行っている。



◎頻繁に使うことで生徒も慣れ、モチベーションも高まる。



◎意見を出すハードルが下がり（主体的）、簡単に班員や他班の意見を共有（対話的）でき、個々の考えが深まる（深い学び）。

◎PDFで簡単に保存ができ、簡単に振り返ることができる。

△タッチペンやタイピングなどに習熟しておらず、手間がかかる。

△ボード作成に気をとられて、読解がおろそかになることがある。

△（使用すると）楽しいので、授業の雰囲気の変化が難しい。また、机のスペースが狭くなる。



↑班活動を見取りながら助言



タッチペンも活躍→



【4人1組でJamboardを使って考える(5分)】

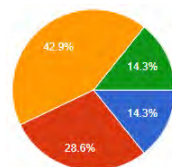


【全10班の考えをクラスで共有する(4分)】

2 フォームの小テストやアンケートを使って根拠を示した解説を行っている。



◎今までは「ここができていない」という問題を、教員の経験則で話していたが、小テストやアンケートの結果がすぐに見えるので、根拠を示しながら話ができ、生徒も納得しやすい。



3 デジタルでの課題提出は迅速かつ効率的に評価できる。



◎録音機能を使って、スピーキングテストをクラスルームで課題として提出。英文添削指導もデータで提出、データで返却可能。（英語）

◎動画撮影でフォームの確認が可能。（体育）

△いつでもできるがゆえに後回しにしたり、勤務時間外にしたりしてしまう。



B 生徒指導・進路指導・部活動の情報化

4 HRの連絡事項はClassroomに表示することで、情報の共有がスムーズに。



◎ ClassroomにHRの連絡事項（健康観察・課題提出・アンケートなど）を掲載することで、配る紙の量も減り、生徒の情報の取りこぼしが少なくなった。



△大量のデータをうまく管理する必要があるため、教員、生徒ともに情報の取捨選択能力が必要である。



5 推薦指導などの進路指導でも、Classroomの課題提出を活用。



◎ 志望理由などの文章はデータによるやり取りで指導が可能に、面接指導はZoomやMeetなどで遠隔指導が可能になった。

△face to faceの指導が減り、本人の表情を見ながらできていたことができなかった。

△職員室にあいさつをして入り、担当の先生に声をかけてお願いする・・・など当たり前とされてきたコミュニケーションが減ってきている。



6 生徒とのオンラインでのコミュニケーションに透明性を保つ。



◎ HRだけでなく、部活動などのクラスルームも多数あるため、各クラスルームに教員は必ず複数名所属し、管理職や非常勤の先生など、自由に入れるようアカウントを整備したことで、透明性が保たれている。

C 校務・校内研修の情報化

7 校内組織の工夫で、効率化と活性化を実現。



◎ 技術面から支援する『教務課情報係』、授業改善から支援する『教務課企画係』を設置し、各年次2名ずつを配当して強化したことで、学年間の情報共有がやりやすくなり、円滑に業務が進行するようになった。また、転勤などで担当がいなくなることによるトラブル発生リスクが軽減された。

◎ 年度当初に自由参加の形で“自主研修会”を開催した。基本的なChromebookの操作から、授業実践の紹介まで、丁寧に説明しており好評だった。また、併設する中学校の先生も多数参加することができた。



8 情報共有には実践事例通信や、動画を活用。



◎ Chromebookの活用授業などを紹介する企画通信を随時発行し、全員に配付することで技術の伝達がスムーズになり、困ったときも聞きやすくなった。

◎ 例えば「連絡先をcsvで取り込むには？」のような、紙の説明資料では説明しにくかったり、紙の説明資料を作る労力がかかったりする場合に、マイクで説明を加えながら実際の画面上の動きを録画し、Classroomの「高校職員室」（教員のみ見れるもの）に投稿し、周知した。

※併設の津山中学校（数学）では、生徒から多い質問については解説動画を作成し、Classroomでシェアしている。



9 研修資料はGoogleDriveで共有し、ペーパーレス会議を実現。



◎ 総合教育センターの研修支援を遠隔で行った際や、校内の各種会議資料はClassroomやGoogleDriveにアップし、『必要な人だけ、必要な場所だけ印刷する』ことにしたことで、全員の机の上に確認しながら資料を配付し、会議後は取りあえずファイルする、という紙資料のムダが減った。

△依然として「紙で資料を配ってほしい」という声もある。



【まとめ】

昨年度から津山高校では授業内外を問わずICT活用を進めており、本年度に入り、組織としてより効率的な支援体制が整いつつあります。現状課題もあるが、試しながらやってみる、使ったらいいことがありそう！と前向きに考えてもらえるよう取り組むとのことでした。



G I G Aスクール環境を活用した教育の情報化の取組を取材しました。

【概要】

笠岡高等学校では、新しい知や価値を創造していくために必要な力の一つとして「未来開拓力」の育成と、生徒の主体的な学びにつながる効果的なICT活用を一体的に実現するために、①誰一人取り残すことなく公正に個別最適化された学びを提供し、資質・能力を一層確実に育成する、②主体的・対話的で深い学びの更なる充実に向け、教員・生徒の力を最大限に引き出す、以上、2つの柱を目標に掲げ、全教職員が一丸となって取り組んでいます。その一部を紹介します。

活用しているICT環境は、①1人1台端末 (iPad) ②教師用端末 (iPad) ③Google Workspace for Education Fundamentals (Classroom、YouTube、ドライブ、スライド、Meet、Forms、Jamboard) ④デジタルノートアプリ (GoodNotes) ⑤Apple TV、Apple Pencil など

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A ICTを活用した取組の様子

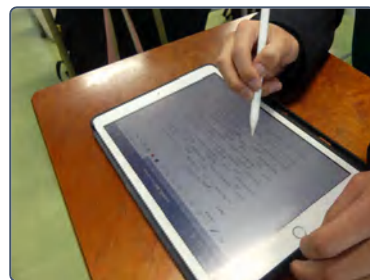
1 個人および協働的な学習でGoodNotesの活用

【普通科1年生のコミュニケーション英語Ⅰの授業】

- ①【音読練習】学習したレッスンパートを全体練習ののち個人で音読練習。
- ②【デジタル教材を利用した個人学習】共有ドライブに保存してあるプリント (パート全体の本文について、1文につき2~3ヶ所を空欄にしたもの) をGoodNotesに取り込ませる。Apple Pencilを用い、色は黒色でプリントの空欄を個人で埋める。内容を思い出すのに時間がかかったり、綴りに自信がなかったりする場合、印 (△など) やマーカーで色を付けさせる。(印があった箇所は後の家庭学習で重点的に復習させる。)
- ③【ペア学習】②で取り組んだ空所補充に不明な点がある場合、ペアで相談し合う。協力することで解答できた場合、色を変え (青色)、記入する。
- ④【答え合わせ】教科書やノートを見て解答を確認し、赤色で直していく。
- ⑤【振り返り】何が原因で解答できなかったのか分析させ、家庭での復習に取り組ませる。



iPadを活用して個別に音読練習



GoodNotesに取り込んだプリント

2 総合的な探究の時間「地域学」×1人1台端末の活用

- ・1年生の地域学 (地域探究活動) では、笠岡市役所の協力を受け、笠岡市を舞台に、実際に各研究テーマのグループで駅前や北木島などの市内各地を現地調査するなど、地域課題の解決に向けて探究活動を実施している。これらの学習場面に1人1台端末をうまく活用することで、学びの質が高まり、探究活動の活性化につながっている。
- ・笠岡市長や笠岡市役所の職員から笠岡市の現状や市が抱える諸課題についての講演を聞き、生徒は、iPadに配信された資料に適宜メモを取り、理解を深めた。
- ・福山市立大学都市経営学部の教授から探究活動を行う上で必要となる方法を学ぶための講習会をオンラインで実施し、探究活動における情報収集の手法や課題の設定方法について学んだ。意見やアイデア等をまとめたり整理したりするためのブレインストーミングとKJ法について、iPadでJamboardを使うことによって、多くのアイデアを出し合うことができ、より質の高い学習活動となった。
- ・12月の発表会に向けたポスター作成において、iPadの活用が、1「必要なデータの整理やまとめ」、2「生徒独自の創意工夫を凝らしたコンテンツ作り」、3「学習活動のデータ蓄積」にうまく寄与している。



意見とアイデア等を整理しまとめる



Apple Pencilの効果的な活用



可視



思考



対話



活用



共有



記録

3 充実したICT環境を利用した各教科等での活用

【環境：全教室にプロジェクタ・PC、教室タイマー完備、コンピュートルーム2室（90名同時に利用可能）】



- ・授業では、Apple Pencilで手書きした内容も含めApple TVを使えばスクリーンへ瞬時に拡大提示できるため、板書が劇的に効率化し、生徒が考え、話し合う時間を多く持つことができる。
- ・手書きの注釈が入った資料や入試対策などの解説動画は、デジタルデータとしてGoogleドライブなどに蓄積でき、隙間時間を使った学習や主体的な学びを促すコンテンツとして生徒にも好評で、活用が進んでいる。
- ・iPadの活用は、インタラクティブな授業展開を可能とし、生徒は主体的に授業に参加できるため、学習の理解度の向上に寄与している。



教室のICT活用の様子

B デジタル・シティズンシップ

※「情報技術の利用における適切で責任ある行動規範」のこと

4 情報技術の利用における適切で責任ある行動規範



- ・従来からの情報モラルに関する学習の範囲を広げ、情報社会の影の部分だけでなく、積極的な情報技術の活用や情報社会へ参画する態度など、生徒自身が主体的に情報社会との適切な関わりについて考える取組を行っている。
- ・「メディアバランス」の考え方の一つである「人々の生活にとって良いこと、役に立つことを優先したデバイスやアプリの機能や特徴」を意識し、よい活用に結び付けるための具体的な方法を主体的に考え・実践・評価する取組などによって、よりよい学びに繋がる使い方を実践することができている。
- ・端末活用に関するルールについては、最低限に絞り、ルールで規制するだけではなく、生徒に何が大切か考えさせている。これまでのところ、問題行動は特には発生していない。
- ・生徒が端末を自由に使用することには、保護者から不安の声もあったが、生徒自身が何に使っているか保護者に説明したり、iPad配付資料に保護者が所見を記入する仕組みを導入したりして、協力的な理解が得られた。



遠隔技術を活用した講演会の様子



iPadを活用し理解を促進する

C 推進体制づくりと校務の情報化

5 端末の活用を踏まえた効果検証とICT活用の推進



- ・iPad導入前にICT検討委員会において、学校の実態に応じた端末活用の方向性やApple Pencilの有効性の検討など、綿密な準備を行うことで、年度当初から既存の教育実践とICTを活用したスムーズな学習活動が展開できている。また、数年前から取組んできたiPadを活用した授業改善のノウハウの共有が、前向きな活用の推進力となっている。
- ・学力向上委員会の研究テーマを「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業と「情報活用能力の向上～千鳥型学習スタンダードに基づいた授業研究～」に設定し、全教職員でICTを活用した授業改善に取り組んでいる。
- ・今後も、ICT委員会（ICT検討委員会から組織替え）を中心に、総合的な探究の時間をはじめ、各教科での効果的な取組などのノウハウを集め、更なる活用に向けた整理・蓄積を進めていく。



Apple Pencilの活用場面



iPad活用に向けた研修の様子

6 学校・生徒・保護者間の積極的な情報共有



- ・さまざまな学校情報を生徒・保護者に随時発信し、スマホやパソコンで、いつでも確認できるようにしている。
- ・新しい情報発信のツールを数年前から模索し、2年前に「まずやってみよう」の試みから、活用の利便性を考え「Twitter」を導入している。学校の様子を含め修学旅行の活動も投稿するなど、リアルタイムで情報を確認できることから保護者にも大変好評である。
- ・本年度は、YouTubeも開設し、学校や部活動の紹介動画を掲載している。



県立笠岡高等学校公式Twitter

【まとめ】笠岡高等学校では、1人1台端末の活用に向けて、「生徒の主体的な学び」につながる取組を組織全体で推進されています。また、iPad導入前から生徒の実態に応じた活用の可能性を追究し、導入後も日々の取組を効果的に共有するなど、生徒一人ひとりの個性や能力に応じたきめ細かな教育活動につながる取組も実践されています。今後は、さらに機動的な組織体制づくりを進め、具体的な実践内容を学校全体のノウハウとして蓄積し、全教職員で共有・活用することで、生徒の資質・能力の育成に向けた組織的な取組が続けられると感じました。



倉敷市立精思高等学校でのGIGAスクール構想推進の取組を取材しました

【概要】

精思高等学校では、「社会の中でしっかり生きていくための意欲と自信を持った生徒」を育成することを目標に、多様な生徒一人ひとりに応じたきめ細かい学習指導が行われ、分かる授業に重点を置いた様々な取組を実践しています。そこでは、短焦点型プロジェクトを全普通教室に早くから導入した学校として培ってきたICT活用のノウハウが随所に活かされています。GIGAスクール構想実現に向けた、その取組の一部を紹介いたします。

活用していたICT環境は、①1人1台端末（Chromebook）②教師用端末（Chromebook、iPad）③Google Workspace for Education Fundamentals（Classroom、YouTube、スライド、Forms）④アンケートアプリ（Mentimeter）⑤各生徒個人端末（スマートフォン）⑥ビデオ会議システム（Zoom）⑦貸出用端末（iPad）など

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 教科指導における活用

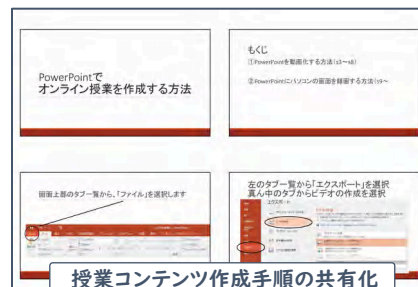
1 既存の教育資源を活かした学びをとめない取組



- ・2年前から授業におけるスマートフォンの効果的な活用を始めた（未所持の生徒は貸出用端末で対応）。
- ・「学びを止めない」観点で、休校対策としてスマートフォンを使った家庭学習に取り組んでいる。
- ・休校対策では、授業動画を単位数に合わせた週2回以上のオンデマンド配信とし、視聴する端末の特性や健康に配慮したコンテンツ作成を心掛け、目標や活動を10分程度にまとめた内容としている。
- ・全教職員が効率よく動画作成ができるように、PowerPointで作成している既存の授業コンテンツを動画化する方法を共有し、作業効率を高め、タイムリーな配信に努めている。
- ・令和3年8月以降は、倉敷市から生徒に1人1台端末が貸与され、授業中のアウトプットの場面に活用できる幅が広がり、授業が活性化している。



デジタル化された授業コンテンツの活用

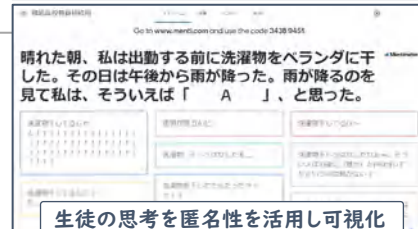


授業コンテンツ作成手順の共有化

2 アンケートアプリを活用した学習活動の活性化



- ・国語表現の授業では、Mentimeterの投票機能を活用して、アンケート結果をリアルタイムに視覚化し、教師と生徒が一体感を味わえる授業を展開している。
- ・匿名で表現できるツールを利用するため、他者を意識することで主体的な取組に消極的だった生徒達が、チャット感覚で安心して質問や投稿ができ、授業中の前向きなやり取りが増加している。
- ・他者からのフィードバック（コメントや反応）の機会が増えることで、発信することの大切さを感じるとともに、自分の作品や成果物をブラッシュアップすることへの足掛かりとなっている。



生徒の思考を匿名性を活用し可視化



瞬時にグラフ化し思考を止めない学び

3 学校と家庭をつなげる自学自習の取組



- ・放課後のすき間時間を使い、生徒の主体性を重視した学びとして、数学科と英語科中心に補充的な要素を含んだ問題演習に取り組んでいる。
- ・数学科は精思高校数学検定として小学校から高校までの幅広い難易度の問題をFormsで出題し、レベルに応じた習熟度別学習に取り組んでいる。
- ・英語科は、英語4技能をオンラインで学習できるアプリ「English 4 skills」を使って、生徒一人一人に合わせた学習を進めている。



個別に最適化された課題に挑戦

4 生徒が主体的に取り組む SDGs の取組



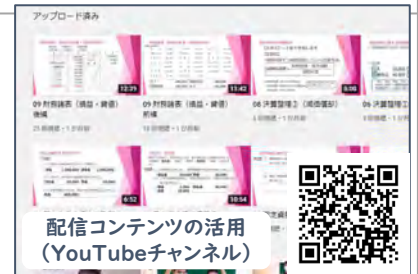
- ・2011年から、被災地支援（チャリティバザー）、地域の防災拠点としての支援、廃棄物の削減支援、防災に関する教育支援などの活動に全校生徒で取り組み、2020年度には、「おかやまSDGsアワード2020」において入賞している。
- ・ICTを利用した実践では、課題解決に向けて学んできたことや調査した結果などを活かして、自分の考えを文章でまとめ、調べたことを根拠に表や図にまとめたり、グループでお互いの考えを共有化したりするツールとして活用している。
- ・商業科の「開発商品の販売」の授業では、地元の企業と連携して商品化し、収益を寄贈する実習を行っている。生徒は、社会の問題を自分事としてとらえ、課題解決に向けた活動を経験する過程で、ICTの効果的な活用法や課題解決に向けた継続的な取組の重要性に気付き、主体的に取り組んでいる。



5 クラウド上のコンテンツを利用した学びの継続と情報発信



- ・YouTubeチャンネルを開設し、「簿記」の授業の内容や解説動画、学校行事や学校オリジナルコンテンツなどの配信を行っている。
- ・広報活動の一環として、中学生向けのコンテンツを公開している。
- ・今後、生徒作品なども随時配信する準備を進めている。

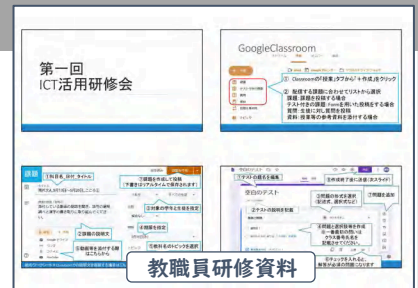


B クラウド活用を促す環境整備と研修の充実

6 ニーズに即した組織的な取組と研修



- ・教務課の情報係（3名）を中心に、クラウド環境を前提とした1人1台端末の導入・運用管理・研修を行っている。
- ・生徒のChromebookは、保管用のキャビネット内で管理・充電しているため、導入から大きな故障や破損もなく運用できている。
- ・1人1台端末を利用するための端末の扱い方や情報モラル指導について、全校生徒を対象に実施している。
- ・小規模校である特徴を生かし、教職員の困り感に対して即座に対応策を考え、提案→研修→実践の取組をスピード感を持って行っている。
- ・休校対策についても、非常勤講師を含めすべての教職員で研修を行い、共通認識を持って対応している。
- ・市立の学校間で研修会を実施し、各学校の実践例やノウハウなどを水平展開し、取組を更に推進していく研修を行っている。



C 地域とともにある学校づくりを目指した連携

7 「つながる授業」を通じて実社会への対応



- ・「外部の利害関係のない大人と触れ合う取組」として、1～3年生までの3年間、生徒3名が1組となり総合的な探究の時間を活用し、大人の考え方や思いなどに触れ、社会人との関わりによって学びを深める取組をボランティアの方々の協力を得て継続的に実施している。
- ・生徒は1人1台端末を活用し、外部の方との交流内容を整理・表現したり、Zoomを使って遠隔交流を行ったりすることで、コロナ禍でも以前と同じように外部の方と生徒が個別に交流する授業が可能となっている。
- ・社会生活に不安を感じている生徒も、実社会における体験談などを見聞きし、その学びを3年間蓄積していくことで、社会に向き合う態度が前向きなものに変化している。



【まとめ】精思高等学校では、「自主・英知・実践」の校訓のもと、一人ひとりに応じたきめ細かい学習指導を行い、分かる授業に重点を置いた取組が進められています。その理念は「1人1台端末活用」の実践にも引き継がれ、教育資源を最大限活用したコンテンツ制作と発信、生徒の主体的な学びを支援するICT活用の工夫などの取組として表出しています。社会と生徒の要請に即応した組織的で柔軟な対応が印象的でした。



GIGAスクール環境を活用した教育の情報化の取組を取材しました。

【概要】

岡山県健康の森学園支援学校は、小中学校で1人1台端末等のICT活用に関する、文部科学省・総務省の実証実験が行われた教育の情報化の先進的地域である新見市にあります。2011年からiPadを導入し、特別支援教育の観点での個に応じた支援の中でICT活用を進めてきました。個別の学習でのアプリの活用や一斉指導における説明場面でのスクリーン投影型のICT活用について、多くの実践が積み重ねられています。

GIGAスクール構想の推進に関する環境整備では、校内のWi-Fiや1人1台端末、教育クラウドの整備が進み、それまでの実践に加え、Web会議システムや教育クラウドを積極的に活用した新たな取組が広がっています。

今回の取材では、このGIGAスクール環境を有効に活用した新たなICT活用の様子を取材しました。

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 遠隔技術の活用

1 感染症対策による学校行事でのリモートの活用

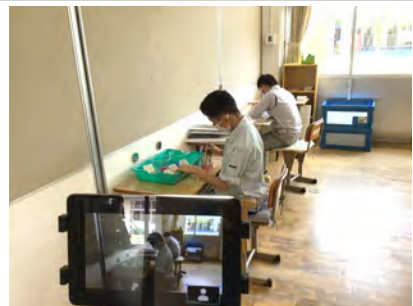


【参観週間】

・参観週間の取組を感染症対策としてリモートで実施している。保護者の希望により1週間の参観期間中の学校生活や寄宿舎生活を選んで、児童生徒の様子を参観できるようにした。健康の森学園支援学校は県内全域を学区としており、遠隔地から登校している児童生徒も多く、普段参観日に参加できない保護者や家族も参観することができ、好評だった。

【学校説明会】

・進学や見学の希望者を対象とした学校説明会をリモートで実施している。学部での授業や寄宿舎での日常生活の様子の紹介や進路相談をリモートで実施することにより、コロナ禍でも、中止することなく計画通りの学校説明会を実施することができている。



2 児童生徒の活動の中でのリモートの活用



【学校間交流】

・市内の学校との学校間交流をリモートで実施している。初めて行った去年は、プロジェクターを使い、交流校と大画面でつないだが、今年度の交流では大画面だけでなく、1人1台端末を使い、個々の顔が見える状態でつないだ。顔が見えることにより、児童生徒が交流をしているという臨場感をより感じることができた。休憩時間もお互いに話しかける場面があり、授業時には見ることができない自然な関わりを見ることができ、リモートならではの効果もあった。中学部では作業学習で、花の苗のポット作りを一緒に取り組んだ。

【訪問教育】

・小学部では、訪問教育での授業を、リモートを活用し学校とつないで合同で実施している。同学年や同世代の友達との交流の少ない訪問教育生にとって、経験を広げる新たな取組となっている。

【寄宿舎】

・3棟ある寄宿舎では、全員が集合することが難しいため、寄宿舎間の打合せだけでなく、行事も全てリモートで実施している。



3 校外機関との連携での活用



・感染症対策のため校外との交流が難しくなり、積極的にリモートを使い、会議や交流の場を確保している。校外実習での企業の方との打合せや児童生徒への助言、各職場への教員の巡回、地域のセンター機能としての専門指導員による教育相談、A L Tによる外国語指導等、コロナ禍でも活動を止めない工夫をしている。



B 授業での活用

4 写真機能の活用



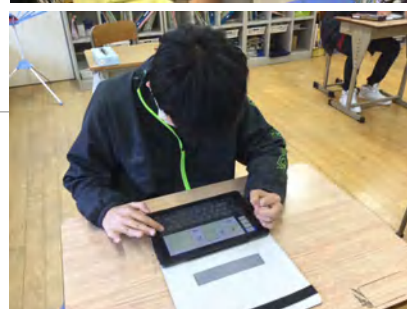
・児童生徒が1人1台端末(iPad)を学習の中で最も活用するのは、写真機能である。小学部の児童も自分で写真を撮ることができ、撮った写真を使って発表したり、学習内容の振り返りに活用したりしている。写真を使っての発表は、説明や感想がより具体的になり、児童生徒の表現力が豊かになっている。



5 自己管理のツールとしての活用



・高等部では各自の端末を使って、スケジュールの管理を行っている。毎週の予定を確認して、必要なメモや資料も端末に保存している。生徒が日常的に使いこなすことにより、校外実習や卒業後の社会生活での自己管理のツールとしての活用も考えられる。



6 コミュニケーションロボット



・iPadを使って遠隔操作でコミュニケーションを取ることができるロボット「OriHime(オリヒメ)」を活用している。行事に参加できない児童生徒がロボットを使って、教室にいながら校外学習に参加したり、離れたアンテナショップの店員として接客をしたりする学習を行っている。Web会議システムでの交流と違い、ロボットになりきり、言葉だけでなく手や頭などの動作を使い、自分の分身としてどこでも行くことができる体験は児童生徒にとって、新たなコミュニケーションの体験となっている。



7 教材データベース「けんもり教材」



・感染症による休校対策として、授業での教材や自習用の動画を、教材データベース「けんもり教材」として、Web上で公開している。リモートと組み合わせることにより、遠隔授業や家庭学習、自主学習で活用することができる。今後も感染症や災害による休校や出席停止が考えられる中、様々な授業形態を想定した準備をしておくことは、学びを止めない観点からも重要なことである。

C 校務での活用

8 教育クラウドを活用したペーパーレス会議



・Googleドライブを活用したペーパーレスの取組を行っている。教員の1人1台端末を活用し、会議の資料をPDF形式のデータで共有することにより、資料準備や保管に効率化が図られている。今後、寄宿舎を含む教職員全員への端末整備が進めば、スケジュール機能等を活用することで、勤務時間の異なる、学部と寄宿舎の職員間での情報共有や連携のツールとしての活用も考えられる。



9 積極的な情報発信



・校内の取組や様子について積極的な情報発信を行っている。また、寄宿舎を持つ支援学校として保護者からも情報発信へのニーズが高い。学部間で分担し、学校の様子については、ホームページ、ブログ、Facebook、メールマガジン(要登録)で、毎日昼夕の給食のメニューについてはTwitterで紹介している。



【まとめ】

GIGAスクール構想以前から積極的に授業の中で効果的なICT活用を進めてきた健康の森学園支援学校ですが、さらに環境整備が進み、遠隔技術の活用を中心に、幅広く様々な授業や業務の改善を進めている様子を伺うことができました。遠隔技術の活用は、感染症対策の側面が大きいのは確かですが、時間と距離を縮めるICTの活用は、児童生徒の体験や経験、新たなコミュニケーションの場になっているのではないのでしょうか。また、積極的な情報発信による学校経営への好影響も感じられました。

GIGAスクール構想の推進には、各校が同じ実践や目標で進めるのではなく、それまで抱えてきた課題そのものに対し、教育の情報化の推進がどう寄与できるか、という視点の大切さを感じました。



GIGAスクール環境の活用と地域交流の様子を取材してきました

【概要】

備前市に位置する岡山県立東備支援学校は、東備地域と岡山市の一部を通学区域とする特別支援学校です。児童生徒の卒業後の豊かな生活につながるよう、地域との関わりを大切にしながら、主体的な学びと自立につながる力の育成を目指した教育を行っています。地域の伝統工芸でもある備前焼の制作や手芸、農業等に関する作業学習、販売実習、環境美化の活動、校外学習や体験学習等、数多くの学習や行事で、積極的な地域との交流が日常的に行われています。

児童生徒にとって、将来の生活の場となる地域との交流は、実践的な学びを通して人間関係を広げ、人とのつながりを作り、就労の場や生活の基盤を築いていくことにつながります。

こうした日々の学習の中で進められてきたICT活用は、教師が大きく映して見せながら説明する場面での活用や、個に応じた学習の中でアプリを活用し、主体的に自ら働きかける場面での活用が中心でした。GIGAスクール構想の推進によるICT環境整備により、1人1台端末の環境が実現し、新たな活用が始まり、積極的な情報発信も行われています。



校内にある本物の登り窯

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 児童生徒の主体的な活動を充実させる活用

1 QRコードの活用



・電子マネーやパンフレット等、日常生活でも目にすることが増えてきた「QRコード」を学習活動の中に取り入れている。校内でのオリエンテーリングとして、チェックポイントにあるQRコードを見つけ、読み込んだ資料に書いてある課題に取り組む学習を行っている。ゲーム的な要素もあり、学習を繰り返すうちに児童生徒も慣れてきて、QRコードの読み込みが、児童生徒の主体的な活動のきっかけになり、興味を持って意欲的に行動することにつながっている。



← ミッション 例



QRコードを読み込んでミッションに挑戦

2 プレゼンテーションアプリの活用



・iPadのプレゼンテーションアプリのKeynoteを積極的に活用している。教師の説明場面で使う提示用の教材の他、児童生徒の学習のまとめや発表でも活用している。操作がわかりやすく、作成した教材や発表資料を簡単に共有でき、参考としたり再利用したりすることもできる。

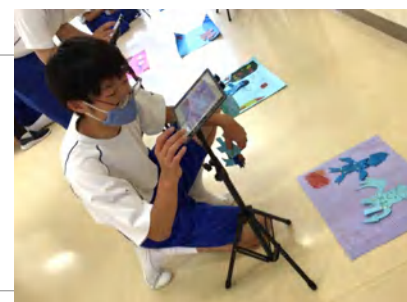


Keynoteを使った一斉指導

3 アニメーションの作成（高等部）



・高等部の美術ではiPadを活用したアニメーションの作成に挑戦した。画用紙と割りピンを使って動物やキャラクターを作り、iPadの写真機能を活用して1コマずつ撮影していく。全体の動きをイメージしながら、各パーツの位置を決める。完成した動画をみんなで鑑賞して楽しむことができていた。



1コマずつiPadで撮影

4 生徒会選挙（高等部）



・高等部の生徒会選挙では、ポスターのQRコードから立候補者の公約を見ることができるようになり、Google Formsを活用して、iPadから投票できるようにしたりしていた。生徒が各自で端末を操作し、主体的に行動することにより、立候補者の演説や公約に興味を持ち、自ら「選ぶ」ことにつながっていく。主権者教育の基礎的な学習にICTが役立っていた。

5 PC検定（岡山県特別支援学校技能検定）



・パソコンによる文字入力や文書作成の技術向上を目指して岡山県特別支援学校技能検定のPC検定に挑戦している。総合的な探究の時間や朝のチャレンジタイムで練習を重ね、各自で上の級や段の合格を目指している。検定は決められた時間内で、課題となる文章を正確に入力することが求められる。具体的な目標が見えることが、練習する意欲につながっている。



検定に向けて繰り返し練習

B 地域交流と情報発信を充実させる活用

6 Web会議システムを活用した学校間交流（小学部・中学部）



・小学部と中学部では、近隣の学校とWeb会議システムを活用した学校間交流を行っている。事前の教員間の打合せもオンラインで行った。直接話ができる等、対面の交流でしか得られないものも多いと思われるが、感染防止対策と効率化等の複数の効果があった。従来の対面での交流に合わせて、感染防止対策等の状況も踏まえながら、交流の継続の方策や効率化の一つとして考えられる状況ができている。



交流の打合せもオンラインで

7 Web会議システムを活用した家庭訪問



・感染症対策により学校での活動が大きく制限され、変更や中止が余儀なくされる中、Web会議システムの活用は、大きな可能性がある。保護者との関係づくりは今後の児童生徒への支援に欠かすことができず、必要に応じて家庭訪問にもオンラインを取り入れた。保護者の負担を減らすことができると同時に、ICT機器を活用する経験を増やし、今後の端末を持ち帰っての家庭学習へもつながると考えられる。



オンラインのメリットを生かした研修

8 教員研修での遠隔・動画技術の活用



・教員研修でも積極的にWeb会議システム等の遠隔や動画の技術が活用されている。校内研修では、感染防止対策として全員の集合を避け、学部単位やグループ単位で部屋を分けて、校内配信で行っている。また、研究発表等も外部参加者へ向け遠隔で行い、新たな発表形態として活用されている。移動時間や会場設定の柔軟性ができ、メリットを生かした活用が考えられている。また動画を使った研修は、作成段階での負担は増えるものの、繰り返して広く活用することができる。

9 ブログによる情報発信



・地域交流を進めていくには、積極的な情報発信が大切になる。東備支援学校は、ホームページやFacebook、Instagramを通して、各学部の活動の様子を知らせたり、給食のメニューを毎日更新したりするなど、積極的な情報発信を続けている。学校の取組を広く知ってもらい、児童生徒の頑張りを知らせることは、学校の活動や児童生徒の障害への理解を進め、学校の応援団を増やすことにつながっている。



わくわくとうび

【まとめ】

12月に行われた「ふれあいとうびまつり」では、それまでの学習のまとめとして、学習の発表や作品展示、販売実習等が行われ、児童生徒の主体的な活動の様子と保護者や地域の方々の協力や交流の成果にふれることができました。発表の中では、絵カードとしての提示や音楽再生で、販売学習では、レジやバーコードリーダーとしての活用されるなど、いくつものICTの活用場面がありました。また、当日見に来ることができなかった人たちのために、ブログを通して発信する、といった自然な形で活用がされていました。いずれも普段の学習の延長で、ICTを使うことを、わざわざ考えるのではなく、GIGAスクール構想に沿って、無理のない必要に応じた活用がなされていました。こういったことの積み重ねが、児童生徒の将来につながる生きた力になるのではないかと感じました。



販売学習ではiPadをレジとして活用



岡山県総合教育センターにおける教育の情報化の取組をまとめました

【概要】

岡山県総合教育センターは、今年度で開所15年目を迎えました。教職員の研修機関として、2019年度は、年間に延べ約750講座を実施し、延べ約25,000名が受講しました。

近年の急速な社会の変化に対応するため、学校では新学習指導要領への対応や働き方改革が求められており、教職員研修の在り方も変化してきています。

I C T 機器やインターネット技術を中心とした通信環境の整備も進み、eラーニングや遠隔技術を活用した新たな研修形態も可能になってきました。

一昨年来のコロナ感染症防止対策において、教育の情報化は加速され、センターでも研修の質の向上と効率化の取組を進めています。その様子を紹介します。

【教育の情報化の推進に関する活用のポイント】

A 研修講座における形態の工夫

1 遠隔研修の取組



- ・県立学校では令和2年5月から、市町村立学校では令和2年6月から、管理職研修、経験年数別研修を中心に、Web会議システムを活用した教員研修を実施している。
- ・受講者は各学校や各教育委員会で受講でき、移動の負担が少ないという長所もあるが、受講者同士の交流がしにくい面もある。
- ・県内ほぼ全校が使用できる「Zoom」を中心にGoogle Workspaceのサービスを組み合わせている。
- ・当初は感染症防止対策として実施してきたが、令和3年度以降も、研修内容に合わせて計画的に取り入れている。
- ・県内各学校のI C T環境とセキュリティポリシーの違いにより、受講者が使用可能なWeb会議システムやクラウドサービス等が異なり、研修環境に制限が生じる場合がある。今後、共通で使える環境が広がると、クラウドでの情報共有等、活用の幅が広がる。



研究授業を配信した遠隔研修（初任研）

2 ハイブリッド型研修の取組



- ・令和2年10月に、eラーニングシステム「e研修所おかやま」をリニューアルし、eラーニングシステムによる動画やPDF資料の掲載が容易となり、研修講座で積極的な活用が進んでいる。
- ・eラーニングと集合研修や遠隔研修を組み合わせることにより、研修の一部を動画や資料を使って事前又は事後に行うこともできるようになった。
- ・集合研修の前に「事前eラーニング」を行うことにより、協議・演習等、集合研修ならではの協力的な研修の時間を増やすことができる。
- ・研修動画はYouTubeチャンネルで、約60本を公開している。



eラーニングシステムの研修資料

3 ハイフレックス型研修の取組



- ・令和3年7月より、センターで行うすべての研修講座を対象に、受講者が「集合研修」又は「遠隔研修」の研修形態を選んで受講できる「ハイフレックス型研修」を実施している。
- ・「遠隔研修」で参加した場合も、協議や演習等のグループ活動に参加でき、「集合研修」で参加した場合と同質の研修を受けることができる。
- ・会場設営やWeb会議システムの準備や操作、画像と音声の調整等、講座運営の新たなノウハウが必要だったが、学校現場や受講者の状況に柔軟に対応でき、どのような状況になっても「学びを止めない」研修が実現できている。
- ・日常的な配信の経験は、指導主事のI C T活用のスキル向上につながっている。



集合研修と遠隔研修を組み合わせ実施

B 研修資料の作成と研修支援

4 教育の情報化ユニット研修



- ・G I G Aスクール構想の推進において各校の課題となっている「教員のICT活用指導力の格差」の問題への対応として、いつでもどこでも短時間で研修できる研修資料「教育の情報化ユニット研修」を作成した。授業や校務でのICT活用を進めるきっかけとして、個人研修や校内研修での活用を期待している。
- ・令和2年度に「G I G A端末導入期編 (31unit)」と令和3年度に「授業づくり編 (4unit)」があり、1ユニットは、研修資料 (閲覧用と印刷用) と動画で構成され、10分程度の研修時間で、いつでも繰り返し視聴することができる。
- ・経験年数別研修講座でも事前課題として活用している。
- ・StuDX Style (文科省) でも「自治体の事例紹介」として紹介されている。



ユニット研修プラス「授業づくり編」

5 Web資料「おかやまICT活用実践事例集」



- ・令和3年度当初より多くの学校で、授業での1人1台端末の活用が本格的に始まり、様々な実践が進んでいる。また、具体的な活用方法や実践事例を学びたいというニーズも高まっていることから、センターでは県内の学校を取材し、事例としてまとめWeb資料「おかやまICT活用実践事例集 (G I G A取材)」として順次公開している。
- ・事例は授業での活用だけでなく、推進に関する組織体制や校内研修の様子、遠隔技術や教育クラウドの授業外での活用も取り上げている。
- ・訪問や遠隔で、校内で中心となる担当の教職員に話を聞き、センター側の担当者が記事としてまとめ、その後、何度か校正のやり取りをして公開している。
- ・取材先の学校からは「これまでの実践を振り返る事ができた」「校内の様子を宣伝する機会になった」といった感想を聞くことができた。



おかやまICT活用実践事例集

C 推進体制の整備と校務への活用

6 指導主事の1人1台端末の活用



- ・令和2年10月より、センターの教職員もWindowsタブレットで1人1台端末の活用を始めている。
- ・Teamsを使ったペーパーレスの会議、連絡や書類の共有、ZoomやMeet等のWeb会議システムの活用等、日常的に使うことにより、活用場面が広がっている。
- ・会議や業務での使用が、研修講座でのICT活用を推進し、クラウドサービスの積極的な利用や遠隔研修・ハイフレックス型研修のスムーズな運営につながっている。



研修運営や所内の打ち合わせで端末を活用

7 所内学習会の取組



- ・所内での1人1台端末の導入時から、所内DX推進のミニ研修を行っている。基本的な端末の使い方に始まり、所内の情報機器への接続方法、アプリやクラウドサービスの使用方法など、希望者へ月1~2回30分程度の研修を行っている。
- ・研修の様子は、動画として共有し、個人研修の資料として活用できるようにしている。



所内ミニ研修「最新機器の紹介 (360°カメラ)」

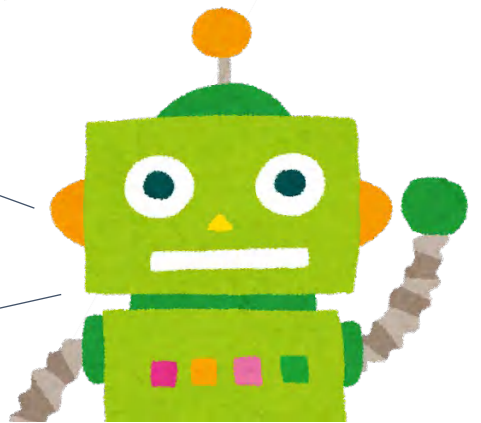
【まとめ】

県内の学校への取材を通して感じていることの中に、授業だけICT活用が進んでいる学校はないということがあります。授業以外の校務で教師が日常的にICTを活用し、その良さや利便性を感じる事が授業での活用につながってくるのかもしれませんが。そういった意味でも、センターの取組は、日常の業務の中で1人1台端末のを活用することにより、ICT活用のスキルを身に付け、そのことが研修講座で生かされていくと考えています。

G I G Aスクール構想の推進には、校内を動かす大きな原動力が必要です。教育の質を向上させ、効率化を図るという一見矛盾した二つを両立させるためには、教職員一人ひとりが「より良い学びを目指し、ICT活用の良さを知り、授業改善に取り組む熱意を持つこと」が、学校を動かす大きな原動力となると思います。



カツヨウノ
ヒントガ
ココニアル!



令和4年3月発行 おかやまICT活用実践事例集 GIGA取材編

【編集兼発行所】岡山県総合教育センター

〒716-1241

岡山県加賀郡吉備中央町吉川7545-11

TEL 0866-56-9101 FAX 0866-56-9121

URL <https://www.pref.okayama.jp/soshiki/215/>

E-mail kyoikuse@pref.okayama.lg.jp

